

a 学校教育目標		b 経営理念 ミッション・ビジョン		【ミッション】(自校の使命) 自分を愛し、夢を語る児童の育成 【ビジョン】(自校の将来像) 「通ってよかった」「通わせてよかった」と誇りに思われる学校										
ふるさとへの愛情と夢を持ち、自ら学び、心豊かで、健やかな児童の育成 ～「かしこく」「やさしく」「たくましく」～														
評価計画				自己評価				改善方針			学校関係者評価			
c 中期経営目標	d 短期経営目標	e 目標達成のための方策	f 評価項目・指標	g 目標値	10月	2月	i 達成度	j 評価	k 結果と課題の分析	n 改善方針	l 評価			m コメント
					達成値	達成値					イ	ロ	ハ	
確かな学力の育成(かしこく)	授業力の向上	○小泉小学習モデル(「課題設定」「個人思考」「集団思考」「まとめ」「振り返り」)に則った授業 ○既得の知識を事象に関連付ける力の育成と「話型」「振り返り」の効果的な活用 ○定期アンケート評価による成果と課題の把握、分析、改善策検討	○「話型」の活用による具体物、半具体物を用いて説明する(表現する)児童の割合 ○「わ(わかったこと)」「が(がんばったこと)」「と」「(友だちの考えから分かったこと)」「も(もっとやってみよう)」が書ける児童の割合 ○外国語科のやり取りにおいて、簡単な語句や表現を用いて、3往復程度の会話を継続できる児童の割合	7月70% 12月80% 2月90%	72.5% 90.4% 86.0%	82.2% 90.4% 86.0%	95.7%	B	・「話型」については、各学級で重点的に指導する単元を決め、取組を進めてきた。活用できている児童は教師による評価で82.2%であった。 ・「ふりかえり」については、ほとんどの児童が4つの視点のいずれかで書くことができていた。 ・外国語科のやり取りにおいては、既習表現からその場合った表現を選択して使おうとする姿がよく見られるようになった。しかし、それぞれの学級において、数名程度会話を継続することがまだ難しい児童もいる。	・「話型」については、引き続き日々の授業の中で繰り返し指導していく。発表時だけでなく、ノートに書く説明についても話型を使って書かせ、型の定着を図る。 ・外国語科のやり取りについては、Small Talkの中で、その場面に合った表現を既習事項の中から選択して活用する体験を今後もつまずていく。日常的によく使う表現については、掲示しておき、児童がいつでも振り返られるようにしておく。	○			○全学年で「算数科」の目標値が達成できていないのが気になる。日々、地道な取組を重ねていただいている中で、今後、伸ばしていくことを期待する。 ○低学力の児童に関する評価項目がないのが気になる。今年度からハイパー-QUが実施されている。非承認群や要支援群に属する児童への取組と低学力への取組はリンクする取組となる。そうした観点からの評価活動もお願いしたい。 ○今年度は感染症により、休校があったが、先生方の取組により、授業の遅れも取り戻し、新年度を迎えられること、保護者として本当に感謝している。
	基礎学力の定着	○学力向上週間の計画的、効果的実施 ○計画的、効果的なドリルタイムの実施 ○家庭学習の質的向上とやり切らせる指導 ○学力調査の結果と課題分析を、全教職員で実施、個に対応した手立てと授業改善策の検討	○単元末テスト「思考・判断・表現」のポイント ○学力調査において、全学年が算数科において市平均を3ポイント以上、国語科、理科において全国平均を3ポイント以上上回る。	85%以上	86.9% 86.2%	86.2%	101.4%	A	・単元末テストの平均達成率 国語科90.9% 算数科80.2% 理科87.6% ・国語科と理科においては、全学級において目標値85%を超えている。算数科においては、全学級において85%を下回っており、課題が残る。低学年においては、文章を読んでも問題場面を把握し、必要な情報を取り出して立式するところに課題が見られた。また、高学年においては、「割合」や「分数倍」などの学習で、「比べられる量」と「もとにする量」の関係の把握や、答えが何を表しているのかを正しく捉えるところに課題が残った。	・小泉小授業モデルを継続して全ての学級で実施していく。 ・自力解決で、一人一人がしっかりと考えられるように、問題把握をきちんと行い、見通しを持たせる。 ・集団解決の場面では、複数ある考えの同じところや違うところを明らかにして関連付けを図ったり、切り返しの発問を行い児童の思考を深める場を設定する。 ・1時間の授業の中で、全員の児童がきちんと理解できるように授業を目指し、適応やふりかえりを通して、評価を適切に行う。	○			
豊かな心の育成(優しく)	ふるさとを愛する心身の育成	○一校一貢献をゴールとした生活科、総合的な学習の時間を中心とした「地域貢献活動」の効果的実施 ○学期毎に取組内容の効果の検証、改善策検討	○「振り返り」における「自分の成長」について児童の肯定的評価の割合 ○学校アンケート「小泉町に住んでよかったと思う」児童の肯定的評価の割合	7月75% 12月80% 2月85%	89.0% 99.1%	93% 99.1%	113.0%	A	・「一校一貢献」をゴールとした単元構成によって、自己の成長を感じた児童の肯定的評価は93%であった。振り返りでは、小泉の人々や施設、自然などの良さに気づき、大事にしていきたいという思いを持った児童が多かった。 ・学校アンケート「小泉町に住んでよかったと思う」の項目は、「小泉の地域が好きですか」に変更し、アンケートを行った結果、10月89%から99.1%と評価が向上した。生活科や総合的な学習の時間を中心とした地域との係わりで取組の成果であると考えられる。 ○自己の成長に気付いた児童の割合が、地域が好きだと回答した児童の割合に比べ、約7%低い結果となった。	・児童の「自己の成長」に関する肯定的評価がさらに上がるよう、教師が児童の成長を見取り、評価する場の設定を意識づけるようにする。 ・次年度も、生活科や総合的な学習の時間を中心とした取組により、児童の「ふるさとを愛する心情」の醸成を図る。	○			○地域貢献を意識させ、様々な関わりが持てるよう各学年において取組が進められており素晴らしい。 ○「小泉小5つの宝」の取組が定着してきたのが達成度に表れている。目標の設定と取組の振り返り、強化週間等での重点化等積み重ね、さらなる集団の高まりを期待する。
	「小泉小5つの宝」の継承	○「小泉小5つの宝」(①「ほかほか言葉」②だまって掃除③美しい靴揃え④気持ちのよいあいさつ⑤静かな廊下歩行)の共通理解と日々の取組実施 ○生徒指導部による重点化と強化週間の設定 ○委員会活動児童の主体的な取組推進 ○定期アンケートの評価による成果と課題把握、分析、改善策検討	○「小泉小5つの宝」のうち生徒指導部の設定した重点項目、教職員による見取りの肯定的評価	85%以上	91.7% 91.2%	91.2%	107.3%	A	【気持ちの良い挨拶】 教職員による肯定的評価・・・77.7% 学校では、先生方や来客に進んで挨拶ができていないが、地域で出会った人への挨拶が十分できていない。 【静かな廊下歩行】 教職員による肯定的評価・・・96% 静かな廊下歩行の必要性について理解させ意識を持たせることにより定着が図られた。 【ほかほか言葉】 教職員による肯定的評価・・・100% 「ほかほかことばって素敵！」週間を設け、友だちに優しい言葉遣いや「ありがとう」等の言葉の意識づけが全ての学級でできた。 ・重点項目三つの中で、「気持ちの良い挨拶」だけが目標値を下回った。	・重点に設定した3つの項目の中で、「気持ちの良い挨拶」の肯定的評価が低いことから、まず教職員が大きな声で挨拶をして、児童の意識を高めていく。 ・児童の実態を捉え、月ごとの生活目標を段階的に設定し、スモールステップで目標達成できるようにする。また、PDCAにより取組が児童の成長につながっているか検証する。 ・教職員の意識調査だけでは、評価指標として不十分である。より客観性・妥当性のある指標を設定する。	○			
健やかな体の育成(たくましく)	運動能力の向上	○体力テストの結果分析による課題(平成31年度課題50m走、シャトルラン)の体育朝会、体育科の授業の活用 ①体育科の授業におけるダッシュ実施 ②体育(がんばり)朝会での3分間走実施 ○運動会、持久走大会等において児童が自己目標を決定、目標達成に向けた取組実施	○重点項目「50m走」「シャトルラン」において、平成31年度の国・県平均以上の学年	90%以上	66.6% 91.1%	91.1%	101.2%	A	・「50m走」においては、平成31年度の国・県平均以上の結果となった学年は、91.1%(11/12)。4年生男子以外は、全学年男女とも平均を上回る結果となった。各学年で体育科の授業冒頭にダッシュの取組を継続したことにより、走力の向上につながったと考えられる。 ・体力の向上を図る取組「シャトルラン」については、コロナ対策のため実施していない。	・体育科の授業に取り入れているダッシュの取組を今後も継続し、走力の強化を図る。担任者会において、ダッシュの内容をレベルアップしたい、という意見があったので、回数や動きの種類を増やす等の改善を図っていく。また、本年度作成した「走力アップの動画」を来年度も活用し、走力の向上を図る。 ・体力の向上を目的とした取組については、感染症対策をしながら、実施していく。	○			○コロナ禍にあっても、体力テストや残菜率を目標値に設定し、できるところで取り組まれている。成果も出ており素晴らしい。
	体をつくる	○年2回以上の栄養職員、養護教諭による食の大切さを理解させる取組実施 ○各学級において、給食を食べ切る分量の自己決定と完食しようとする児童の育成 ○各学級での給食マナーの取組向上	○各月学年ごとの残菜率1.5%未満	100%	83.3% 100%	100%	100%	A	・11月に実施した残菜調べでは、全学年で残菜率1.5%未満を達成することができた。また、児童が自分で決めた分量を完食しようとする姿が見られるようになった。担任による日々の指導や、残菜調べの取組を継続して行ったことが成果につながったと考える。 ・1年生を対象に、栄養士による指導を実施し、給食ができるまでについて指導していただくことで、給食を作ってくださいという方の思いや大変さを伝えた。指導以降1年生の残菜率が低下したことから、給食を残さず食べようという気持ちを育てることができたと考えられる。	・残菜率は減少しているため、この状態を維持しつつ、引き続き、食の大切さや感謝の気持ち、完食しようとする気持ちを育てよう指導していく。 ・児童と担任を対象に、残菜調べに対するアンケートを取り、その結果を受けて今後の方針について検討する。	○			
信頼される学校づくり(つながる)	活用する	○平成31年度に開発した地域の教材、施設の効果的活用 ①生活科、総合的な学習の時間における地域教材の発掘、施設との交流 ②ゲストティーチャーの招聘と活用	○地域、施設、人材の活用の効果の検証と新たな教育活動の再構築	各学年学期1回以上	83.3% (5/6)	100.0%	100.0%	A	・感染症予防のため、地域の方と直接触れ合うことができない状況だった。しかし、各担任で工夫し、ICTを活用して特別支援学校の児童(3年)生徒(4年)との交流を行ったり、白滝園に本鼓の演奏風景をDVDにして届けたり(6年)、地域の人に感謝の気持ちを書いた手紙とプレゼント(1年)を届けたり、学習したことを基に、新聞(2年)や幟旗(5年)にして地域に発信したりするなど充実した取組を行った。	・感染症対策のために、直接地域の人と触れ合うことができないことは、今後とも想定される。間接的であっても、地域の人々とふれあい、地域から学ぶことはできることが本年度明らかになった。今後はさらに、どのような工夫ができるか、考え、生活科や総合的な学習の時間の単元を創っていく。	○			○働き方改革に対する教職員の自己評価の高さや勤務時間外の在職時間の少なさは、素晴らしい姿であり、学校経営の素晴らしい姿の表れである。
	発信する	○学校便りの定期的な発行とPTAを活用した地域への配付 ○学年便りや学年の教育活動の様子をHPアップ ○一校一貢献の取組の学期1回以上のHPアップ	○学校アンケート「授業参観、学校行事、学校だより、ホームページ等から学校の様子がよく分かる」の保護者の肯定的評価 ○学校は保護者の願いに応えた教育を行っていると思わますか」の保護者の肯定的評価	90%以上	82.5% 96.5%	91.3% 96.5%	104.3%	A	・感染症対策を徹底し様々な制約の下での参観日を実施したが、保護者の理解、協力があって、無事に終えることができた。 ・学校の取組状況は、毎月1回以上HPを更新し発信した。また、学校便り、学級便りでは、子どもたちの学習の様子が伝わるように工夫して配付した。その結果、保護者アンケートの結果、肯定的評価が目標を上回ったと考える。	・今後も保護者に学校教育について理解をしていただき、また保護者の願いに応える学校となるよう、分かりやすく発信していく。	○			
	組織の活性化と効果的な教育活動推進	○学校経営会議を核とし、ベクトルを揃えた取組実施 ○各部会(研究推進部、生徒指導部、保健体育部)による進捗管理とPDCAサイクルによる改善策の検討実施 ○学校経営会議、衛生委員会を活用した「働き方改革」の更なる推進(45時間以内、持ち帰り)	○「効率的な働き方ができている」「児童と向き合う時間が確保できている」教職員の肯定的評価	100%	75.0% 100.0%	100.0%	100.0%	A	・職員の研究や、学級事務等の時間確保のため、年度途中で木曜日の日課を変更し、下校時刻を25分繰り上げた。また、担任者会等で、時間の有効な使い方について、それぞれ工夫していることを交流した。その結果、10月の時点では、職員の75%が肯定的評価をしていますが、2月の時点では、100%となった。 ・時間外勤務時間も、月45時間以内を概ね達成できた。	・今後も、宿題やプリント等の質・量が、児童にとって適切なものかを吟味して精選していく指導を継続する。 ・職員によって業務内容の偏りがないか、時間の有効な使い方ができているかという視点から、課題がある場合は、学校経営会議等も活用しながら、よりよい方法を模索する。	○			

【:自己評価 評価】  
A:100% (目標達成) B:80% (ほぼ達成) <100  
C:60% (もう少し) <80 D:(できていない) <60

【:学校関係者評価 評価】  
イ:自己評価は適正である。ロ:自己評価は適正でない。  
ハ:分からない。